

「皆さん、お疲れ様でした」

翌朝、狭山は「昨日はおしっこ頑張りましたね」と言ってジュースをくれた。飲みながらいいと言われたのでストローを啜えながら狭山を見る。

「さて皆さん、うんちはどうですか」

「……あ」

つい声が漏れてしまった。狭山がこちらを見る。

「ひなたくん、うんちは出せそうですか」

「あ……え、と……」

そうだった。すっかり忘れてしまっていた。

「おしっこはどうでしたか？ あのあと皆さん上手に出せましたか」

排尿用の布はお風呂の入り口に山積みになっていた。尿意を催したら、自分でそこから必要な量の布を取ってお風呂で排尿。使い終わった布は洗面所にある蓋付きのケースに入れておけば後で狭山が回収してくれる、という流れだった。

「あの……ぼくは……」

葉月も健斗も普通に席を立っていた。そして何でもない顔をして戻ってきていた。でもそれがただ手を洗いに行っただけ、というのではないことは分かっている。だって、席を立つときには二人とも毎回傷薬を持って行っていたから。

でもひなただけは一人で排尿ができなかった。怖くて。自分で布を尿道口にあて、吸わせるようにして排尿する——たったそれだけのことなのに、なぜかとても怖くて。それでずっと我慢していたら、トイレに立っていないことに気付いた二人が一緒に行って、また同じようにお世話をしてくれたのだ。

「ひなたくん……でもまあ、慣れでしょう。それに痛みの感じ方は人それぞれですからね。少しずつできるようになっていきましょう」

「はい……」

恥ずかしい。二十二歳にもなって一人で排尿ができないなんて——いや、今の話題は『排泄』だ。狭山も話題を戻すように頷く。

「で、皆さん、カテーテルが抜けた日のうちに排便する約束でしたが、排便できた方は？」

全員が黙っていた。誰もできていない、ということだろう。

「排便はトイレですることとなりますが、いきむことで一緒に尿が出てしまうこともあります。ですので排便の際は排尿用の布を尿道口にあてた状態でしましょう——と今頃言っても遅いかなと思っていましたが、もうこれ以上便秘状態が続くのはよくないので、排便していただきます」

「下剤ですか」

口を開いたのはやはり葉月だ。しっかり者のお兄ちゃん。とても助かる。

「そうですね……下剤もありますし、お湯で洗浄することもできます。一番楽なのは腸内洗浄機ですが……」と狭山が説明をしていると、病室のドアが開いた。

「あ、先生」

「クジ作ってきたよ」

「え？」

クジとは一体何のことだろう、と狭山を見ると、苦笑していた。

「分かりました。まあ、仕事をする上でも今のうちにしておいてもいい経験でしょう」

そう言いながら渡された紙に目を落とした。そして顔を上げ、皆の顔を見まわした。

「あみだくじです。排便の方法は三つ、先程言ったものです。下剤、お湯、洗浄機。どれに当たるかは分かりません。誰から引きますか？」

普通に整腸剤ではだめなのだろうか、と思うものの、仕事という言葉が引かなかった。もしかしたら店からも経験させるように言われているのかもしれない。

「若い子からどうぞ」

「えっ」

やはりどんなときでも葉月はお兄ちゃんだった。狭山が健斗を見て、頷いたのを確認してからひなたのところにやってくる。

「どれがいいですか」

「じゃあ……」

きつと遠慮すれば話は進まない。ありがたい、と二人に言う前から一つを選んだ。

結果として、ひなたは下剤になった。健斗が腸内洗浄機で、葉月はお湯。

「腸内洗浄機はベッドで可能です。お湯と下剤は排泄が必要になるのですが……」

「狭山、店から追加要望が届いているよ」

追加要望書、とは一体何のことなのだろう。狭山がまた書類を読んでいる。そしてまた、皆に向き直った。

「お店から、追加の要望が来ています。どうやら皆さんを撮った動画を観て売り出す方向性が決まったようですね」

(売り出す方向性……?)

「まず、ひなたくん。ひなたくんは、赤ちゃんになってもらいます」

「えっ!？」

赤ちゃんに、なる——一体どういうことなのだろうか。

「これから水分補給は哺乳瓶を使います。排泄は全てオムツに。布を使わなくて済んでよかったですね。」

それから健斗くんは乳首イキができるようにとのことです。葉月くんは、二人のお世話。恐らく面倒見の良いキャラクター……と言っても今のままでいいようですが、それで推していくそうです

「つてわけで、トイレは解決したな。健斗くんはその場、葉月くんはお湯を入れたらトイレへ、ひなたくんはオムツに出せばいい」

「や、ちよつと……」

突然赤ちゃんになれと言われ、しかもオムツに排泄だの哺乳瓶だのと言われても困る。到底受け入れられない。そしてどうやら健斗も同じ気持ちのようだった。

「俺もちょっと……乳首でイくなんてマジで無理です」

「大丈夫。退院までにイけるようにならないといけないってわけじゃない。ひなたくんは生活としてできるようにならないといけないようだけど、健斗くんは努力義務ってとこかな。毎日マッサージする様子を撮影するみたいだし」

「……まあ、それなら……」

どうして折れてしまうのだろう。もう少し食い下がってほしいのに。

「ヒナちゃん」

「葉月さん……」

すごく近くで声が聞こえ、振り向くとベッドの横に座ってくれていた。

「僕がお世話だつて。ヒナちゃんのオムツも哺乳瓶も僕がしてあげるから大丈夫だよ」

「俺もするよ。別に俺だつて一日中乳首弄ってるってわけじゃないみたいだし」

「健斗くん……」

二人とも優しい。

(でも——いや……)

たま洗い風俗なんてかなり特殊な店だ。一般の風俗ではないし、当然有名な店でもない。会員制で、知っている人しか行けないお店。ペニスの切除までするのだから、給与も高額——だからきつと、二人も事情があるのだろう。そこまでして働かないといけない事情が。

「……お願いします……」

事情があるのはひなたも同じだ。あまり考えないようにしているけれど、手術も終えた今、もう普通の風俗で働くこともできないし、逃げることもできない。

「じゃ、解決だな」

満足気に笑い、医師が退室した。けれど狭山は残っている。

「よかったですね。でもひなたくんには楽かもしれません。優しいお兄ちゃんたちに甘えて可愛がってもらえばいいんですよ。排尿も楽になりますから。——では、薬と洗浄機を持ってきます。少し待っていてくださいね」

また部屋には三人だけになった。健斗もベッドに来てくれて、二人がぎゅっと抱きしめてくれる。

「ヒナちゃん、哺乳瓶とてもよく似合うと思う」

「葉月さん……」

「そうだよ。あー俺乳首で良かった。オムツとか俺は無理だ」

「ひどいー！」

「でもヒナは似合うからいいって。ヒナなんてある意味今までと何も変わんねえじゃん」

「うん、僕もそう思う。ヒナちゃんはそのままでいいんだよ」

「うー……葉月さんまで」

口を膨らませると二人が笑った。健斗がパンと両頬を挟み、ぷは！と空気が健斗の顔に掛かる。

「はは、やっぱ子供じゃん」

「健斗くんがやったんじゃない！」

でもよかった。もし一緒にいるのがこの二人じゃなかったら、きっと耐えられなかったと思う。

「葉月くん、これがひなたくんのお薬です。ミルクで溶いてあるので抱っこで飲ませてあげてください」
「分かりました」

戻ってきた狭山は哺乳瓶を葉月に手渡した。

「下剤は効くのにな少し時間が掛かります。遅効性なので、その間に葉月くんは腸内洗浄をしましょうね」
「はい」

そして狭山は健斗の元に向かった。

~~~~~

「っ……………あ……………う……………痛い……………」

「ヒナ！」

眠りを邪魔する激痛。気持ち良く寝ていたのに、お腹の痛みで目が覚めた。

(うんち……………)

下痢だ。下痢の痛み。お腹を刺すような激痛。

「ヒナちゃん、うんちしようね」

「あ……………うんち……………」

背後から聞こえた葉月の声。それには目の前には健斗がいた。

「下剤飲んだら。ほら、オムツしてるから大丈夫だ。出したら楽になるぞ」

「出ないよう……………」

「出るだろ。下剤飲んでるんだから」

「やだあ……………だってトイレっ」

こんな、ベッドで排便をするなんて。しかも二人が一緒にいる。こんな近くで、しかも下痢をオムツに排泄するなんてできない。

「ヒナちゃん、ヒナちゃんはこれから赤ちゃんになるんだよ。さつきも上手にミルク飲めたね」

「あ……………葉月さん……………」

顔を上げると葉月が目に入った。優しい目で見下ろしている。腰を擦ってくれているのも葉月だ、と分かった。

「ヒナちゃん、うんち出してみようね。我慢してもお腹痛くなっちゃうし、さつき狭山さんがオムツあててくれたから。だから大丈夫だよ」

「やだあ……………」

店の指示で赤ちゃんになるようにと言われたことは覚えている。でもいきなり下痢なんて。

「ヒナ。顔色悪いぞ。腹痛いんだろ」

「健斗くん……………だって無理だよ、やだよ……………」

無理。いくらなんでも無理。でももう出てしまう。必死にお尻に力を入れてはいるけれど、もう出てし

まいそうだ。

「ヒナちゃん、ヒナちゃんはもうトイレは使えないんだよ。だからここで出してみよう。もし汚してしまったら大丈夫だよ。僕がちゃんと片付けてあげるから」

「葉月さん……」

そうだ。ひなたが赤ちゃんになるようにと言われていたのと一緒で、葉月は世話係と言われているのだ。自分が赤ちゃんになれば葉月は自分の役割を全うすることができない。

「うう……抱っこ……」

ならせめて、抱っこしてほしい。また甘えん坊と言われてしまいそうだけれど、一人でオムツに排便なんてできないし、そんなところを見られたくもない。

「うん、おいで。でもお尻をつけちゃうとうんち出せないから、どうしようか」

「やだぁ……!!」

早く決めてほしい。もう出ちゃう。ダメなのに、お腹の痛みは限界だった。

「や、出ちゃうっ、出ちゃうよおっ!!」

「ヒナ! ほら、おいで」

健斗が腕を引いてくれた。そのままドサリと健斗の腕の中に収まる。

「腰上げて。うんこしやすい体勢を取れよ」

「やぁ! わかんないっ!!」

普段トイレで排泄をしているのだ。それ以外の体勢での排泄なんて分からない。

「ほら、膝立てて」

「んっ」

健斗が導いてくれるのがあるがたい。言われた通り膝立ちになり、健斗の肩に顔を埋める。

「出していいよ」

「んっ……あ、やだぁっ」

後ろに葉月がいる。葉月のいる方に向かって排便なんてできない。

「葉月さっ」

「ヒナちゃん、大丈夫、ここで見てあげるから」

どうやら心細くなっていると思われるらしい。けれど違う。そこにいないでほしいのだ。

「こっちっ、こっちきてっ」

健斗の背後を指して移動を頼む。ようやく合点したのか、ごめんねと言って葉月が動いた。

「ヒナ」

「んっ……健斗くんっ、出ちゃうッ」

「出せ」

「んっ、あっ、あっ!!」

出る、と言う声は音にならなかった。ぐちゅぐちゅ! と大きな音が病室に響く。

「やぁあぁあぁ!」

まさかあんな汚くて大きな音が出てしまうなんて。恥ずかしくて逃げたい。窓から逃げたいけれど窓は

開かないし排便も止まらない。

ぶちゅぶちゅ——ぐるうううう。

お腹が変な音を立てる。でも便は止まらない。完全な下痢で、どろどろしたものが流れるように排泄されていく。

「やああ……」

もう嫌だ。どうしてこんな恥ずかしい思いをしないとイケないのだろう。いきむのも恥ずかしいけれど、自分の意思で止められないほどの排便というのも恥ずかしい。

「ヒナ、大丈夫だから。落ち着いて全部出しちまえ」

「そうだよヒナちゃん、恥ずかしくないよ。うんちしてるヒナちゃんとっても可愛いよ」

「やあ……」

優しいから余計につらい。二人とも優しいから、臭いも汚いも言えないのだろう。

「ごめんなさいいいい……」

お腹が痛い。まだまだ痛い。もつと出る。まだ出る。いきみたい。

「んんんっ」

いきみ感が我慢できず、健斗にすがりつき必死にいきむ。すると奥の方からさつきよりは硬い便がぬるぬると出てきた。

「ああああっ！」

出る。たくさん出る。確かにずつと、入院したときから出ていなかったのだからたくさん溜まっているだろう。でも、だからってこんなに出なくてもいい。せめて二回に分けるとか。いやでも恥ずかしい思いは一度に済ませてしまった方がいいのだろうか。

「ヒナ、上手。ちゃんと出せてる」

~~~~~

葉月はどこまでも気の利く人だった。二人でベッドに寝転んで布団を被る。

「ゆっくりしようね。ミルクキングしたばかりだから、うまく感じられても射精はできないだろうし」

「うん……」

不思議と、葉月には甘えられる気がした。当然ひなたの目がないときだけだけれど。

「いいこ。健斗くんもとてもいい子だね」

まるでひなたにするように頭を撫でられる。少し恥ずかしい。でも嬉しい。

「じゃあ、ちよつと触るね」

葉月の指が乳首に触れた。やはり感じるのは違和感だけ。あと少しくすぐったい感じ。これで射精なんてまずできないだろうな、とつい思ってしまう。

「どっっ？」

「うーん……快感って感じはないかな」

「もしかしたら興奮の度合いに寄るのかも。何かえつちなこと考えてみて」

「えっちなことって言われても……」

この状況でえっちなこと——せめて携帯でもあればオカズを検索できるのだけれど、ここには何一つない。

「あ……なあ、葉月さんのクリトリス見せてよ」

「え」

「あと傷痕。俺去勢モノで抜くこと多かったんだよね」

「そうなの？」

「うん。しかも、竿なし玉ありって最高だった」

「……健斗くんもだいぶいやらしいね……っていうか、ちよつと特殊？」

「そうかな。なあ見せてよ」

「ん」

拒否されるだろうと思っていたのに、葉月は身体を起こして下着ごと脱いでくれた。座る葉月の足の間に身体を入れ、至近距離から見る。

「わ、すげ……ちよつと触ってみてもいい？」

「うん。いいけど、クリトリスは感覚ないよ」

「そうなの？」

「なんか、神経がどうのこうのって先生が言ってたんだ。感じるようになるには一年とか掛かるみたい」
「なんだ」

そうなのか。知らなかった。どうりでひなたが風呂で感じないわけだ。

「でもすげええろい。ここにちんこあったんだよね」

「ん……あったよ。すごく小さかったけど」

「見たよ」

「え？」

「最初の射精のとき。小さくて可愛くなって思ってた」

顔は美人で優しくて、でもペニスは子供のように小さい。それにすごく興奮したことを覚えている。ひなたの巨根もすごいと思っただけれど、葉月のペニスの方が興奮した。

「恥ずかしいな。見られてたのか」

「マジエロかった。もうないと思うと寂しいな」

まだ傷痕は痛いだろう。触れずに見るだけに留める。

「なあ、痛かった？」

「手術後は痛かったよ」

きつと、このやりとりが興奮を高めるためだと気付いているのだろう。葉月は「自分もしたでしょ」とは言わなかった。

「……まだ腫れてる」

「うん……でもすごくすっきりしたよ」

「去勢が？」

「うん……僕は小さいのがすごくコンプレックスだったから……なくなってすっきり。痛いし、ペニスの快感を失ったのは寂しいなと思うけど」

「……治ったら舐めたいな」

「え？」

「ここ。傷痕舐めたい。舐めながらオナニーしたい」

「健斗くん……」

すごく興奮していた。勃起している。ペニスはないけれど、傷痕が痛むからすぐに分かる。

「マジエロい……」

抜きたい、と思った。もしペニスがあったら扱っていたと思う。けれど、ない。手術で失ったから。自らギロチンにペニスを入れたから。

「っは……」

「……健斗くん、僕のここ……見ながら乳首弄ってみて」

「……ン」

拒否なんてする理由はなかった。だって本当に興奮している。何度も漫画で読んだシチュエーション。切り落とされた傷痕の絵を何度も至近距離で見ながら抜いていたのだ。

「っは……」

軽く足を開いて座る葉月の陰部に顔を埋めるようにして四つん這いになる。上体は肘で支え、両手でそれぞれの乳首を捏ねた。

「っは……やば……」

すぐ近くに、ペニスを切り落とした痕がある。その上には控えめなクリトリス。

「皮……あるんだ」

「クリトリス？」

「うん。皮、作ってもらったんだ」

「うん……場所は違うけど、本物みたいでしょ」

「すげえエロい。マジいやらしいな」

尿道の上にある突起。それは緩く皮を被っていた。

「包茎？」

「どうなんだろう。でも興奮してもこのクリトリスは大きくはなれないんじゃないかな……」

海綿体がどうなっているかによるだろう。けれどこの豆粒サイズだ。きっとそこまではないだろう。

「興奮しても勃起できないクリトリスか……」

最高にエロい。ペニスを失ったのに、女性器の一部がついている。でも、陰囊もちゃんとある。

「キスしたい」

「……いいよ」

葉月は何も拒否しなかった。優しいからなのか、葉月も悦んでいるのか。でも、傷痕は少しだけ膨らんでいた。

「葉月さんも勃起してる」

「も、つてことは健斗くんも？」

「してる。めっちゃしてる。だってこんなエロいの見て興奮しないわけないじゃん」

懸命に膨らもうとしているそこに唇を押し当てる。舐めたいけれど、今は我慢だ。雑菌が入ってしまつたら大変だし、申し訳ない。痛まないようにそつと唇を押し当てたまま、鼻から息を吸う。

(エロ……)

陰囊から漂う精の匂い。臭いなんて思わなかった。葉月が陰囊を失っていない、中途半端な身体だと嗅覚から実感できる匂いだった。

「っは……」

乳首を握る指が止まらない。気持ちいい。でもイケない。すごく興奮しているのに。イきたい。扱きたい。ペニスを扱いてイきたい。

ペニスに手が伸びたのは、無意識だった。

「っ……っ！」

「……ないよ。健斗くんにも、ペニスはもうないよ」

静かな声だった。とても、勃起している人の声には聞こえない。

「……葉月……さん……」

苦しい。射精したい。気持ち良くなりたい。すっきりしたい——のに。

「……つらいね……僕もつらいよ。でも、健斗くんはまず乳首できもちよくなるうね。イきたくてイきたくて、痛くなるほど擦ってしまつても、ちゃんとクリームを塗ってあげるから。もし乳首が擦り切れたら、傷薬を塗ってあげる。指で、ちゃんと塗り込めてあげる」

~~~~~

「ハイハイの姿勢ができるかな」

「うん……」

狭山にミルキングをしてもらったときのように、葉月と健斗にお尻を向けて膝をつく。見られている。視線でアナルが焼けるように熱い。

「ヒナのアナルってマジで綺麗だよな」

「うん。すごく綺麗な赤色。ここからうんちが出るんだと思うと興奮する」

「葉月さんも？ 俺も。この皺が伸びるのかなって思うと興奮するよな」

「やだあ……っ！」

人のお尻を見ながらなんて会話をしているのだろう。恥ずかしい。やめてほしい。でも嬉しくて、もつと言つてほしくなる。

「こんな綺麗なお尻なのに、ホースを上手に飲み込めるんだよね」

「すげえよな……使つてなさそうなの穴なのに、食欲つていうか」

「やだあ……あっ……ん……」

お尻に挿入されたホース。少し奥まで入れられて、それからピと音がする。

「お腹、すっきりしようね」

「うん……」

葉月にお腹を撫でもらいながら耐える数分間。お湯は気持ちいいしお腹もすっきりするし、身体は気持ちいいと思うのだけれどこれが終わったらミルクングなのだと思うとつらい。射精したい。気持ち良くなりしたい。乳首を弄って気持ち良く絶頂したい。

「……うん、止まったね。お腹はどう？」

数分経って、葉月が機械の停止を確認した。

「大丈夫……お腹すっきりした」

まだホースは入っているけれど、重い感じはない。ゆっくり抜いてもらって、今度はミルクング用のディルドを入れてもらう。

「……この辺り、かな」

「うん……あ……出る……」

葉月は器用だ。それに物覚えもいい。ひなたも狭山にもらったときの感覚を覚えていたので、二回目ですぐにミルクングしてもらえるようになった。

「うん、出てる」

尿道口の下では健斗が容器を持っていてくれる。どれくらい出せたか分かるように、メモリのついた細い容器。

「あ……やあ……イきたいよう……」

ディルドを少し抜いて、それで前立腺を擦ってほしい。でもそんなことを言っても二人はダメだと言うに決まっている。それならやはり二人が寝ている間にバレないように乳首を弄るしかないのだけれど、シヤワーは二人と一緒に、トイレも不要となると病室から出る理由もなくて、そうなると射精はオムツにすることになって、結局バレてしまうことになる。

「ヒナちゃん、もうすぐいやらしいの全部搾れるから、頑張ろうね」

「やだあ……」

「ヒナ、いいこだから。赤ん坊なんだから、射精なんて知らないんだよ」

~~~~~

「……葉月さん……乳首美味し？」

「うん、美味しい」

葉月が乳首を舐めている。美味しいと言いながら吸っている。

「……ごめん」

「え？ つわー！」

腕を引き、強引にベッドに押し倒す。

「ごめん、やっぱりこっちはいい」

葉月の感じている顔を見る方がいい。

「っ、あ、健斗くんっ」

「可愛い……お尻で射精しような」

もういつでも使えるように枕元にコンドームは置きっぱなしだ。さっと指に嵌めてローションを垂らしてアナルに添える。

「ねえ、いいでしょ。入れてよ」

入りたい。本当ならペニスを入れたかった。でもないから、指だけでもその締め付けを感じたい。

「健斗くん……でも乳首……」

「そのうち自分でするから。だから今は葉月さんが感じてるところ見たい」

ひなたがいつ起きるか分からない。幸い、今まで一度も途中で起きてしまったことはないけれど、今日は起きてしまうかもしれない、という焦りと不安が頭にはある。

「ん……じゃあ、夜……今夜乳首しよ」

「……分かった」

葉月が身体から力を抜いた。それから一つ息をして、アナルに力が込められる。

「んっ……入れて……」

「かわいい……」

それにエロい。ぷく、と膨れたアナルに指を入れる。きゅっと締め付けてくるアナルが可愛くて堪らない。でも締め付けが強いのはアナルの縁だけで、中はねつとりと指を包み込んでくる。

「っは……ゴムなしで入りたい……」

「健斗くん……指で感じてるの？」

「うん……なんでちんこないんだろって思う」

悔しい。こんなにペニスがないうことを悔やむときが来るなんて。つらい。ペニスがほしい。ペニスを入りたい。葉月のアナルにペニスを入れて、むちゃくちゃに腰を振りたい。

「……健斗くん……」

きゅっとアナルが締まった。指が更に締め付けられる。

「ごめん、僕興奮してる」

「え……？」

「健斗くんがペニスがなくてつらいって言ってるの、すごく興奮する」

「葉月さん……」

「ペニス、ないのつらいね。ペニス、僕のアナルに入れて擦りたいね？」

「うん……入りたい。ちんこ入りたいっ」

指を引き抜き、葉月の足首を持って思い切り割り開く。そしてアナルに切断面を擦りつけた。

「っは、はあっ、葉月さんっ」

「すごい……すごいえっち……！ でもダメだよ、健斗くん……健斗くんは乳首で気持ち良くならないと」

「やだっ、嫌だっ！ 入りたいっ、入りたいっ！」

ああ、どうしてペニスがいないのだろう。どうして……どうして！

~~~~~

「んっ……あん……んっ、胸まで洗いました」

「じゃあ、次はお顔だね」

「あれ……おちんちはまだ洗わなくていいんですか」

腕、足、胸と洗ったら次は股間かなと何となく思ってしまった。でもきっとそれは新人が皆思うことなのだろう。担当は楽しそうに笑った。

「そうだよ。僕も最初はそう思ってたんだけど、例えばヒナちゃん、おちんちんを洗った後……あ、おちんちんはもうないけど、お尻を洗ったスポンジで顔を洗ってほしいって思う？」

「あ……思わないです……」

確かにそれはちよつと嫌だ。しかも自分の股間だ。葉月や健斗の股間を洗ったものならいいけれど、自分のはちよつと嫌。

「でしょう？ だからね、先にお顔を洗うんだよ。でも一度タマを洗って、泡を落としてね。お客さんの目に泡が入ったら大変だから」

「はい」

シャワーを出して陰囊を洗う。それから健斗の顔を跨いだ。

「あと、お顔はデリケートなので腰を振るんじゃなく、顔の上で身体をキープして、手でタマを持って洗うんだよ」

「はい」

ぶら下がった陰囊を掴む。けれど、興奮したそれはぶりつとせり上がってしまった。

「あの、硬くなっちゃってるんですけどいいですか」

「大丈夫。むしろその方がお客さんは喜ぶから。硬くなっちゃってごめんなさいって言いながら、優しく擦ってみようね」

万が一目に入っても沁みないローションだよ、と化粧水を渡された。それを陰囊に塗り、顔に陰囊をつける。

「口と鼻と一緒に塞がないように気を付けて。唇に擦りつけるのは喜ばれるから、鼻を確認しながらね。それから目に入らないように、目を瞑ってもらうとか」

「はい。えっと、おめめ、瞑ってください」

「はい」

健斗が目を閉じた。鼻を塞がないように確認しながらコリコリに張った陰囊で顔をマッサージしていく。

「うん、上手。陰囊もちゃんと張ってるし、いい感じだね。分からないことはある？」

「いえ……あ、顔はどうやって流したらいいですか？」

健斗の身体から降り、腕を引いて上体を起こしてあげながら問う。

「ああ、顔のは化粧水のローションだからそのまま大丈夫。つるつるになるし、何より陰囊で塗ってもらったローションってお客さんすごく喜ぶから流さずに帰りたいがるよ」

「そうなんですか……恥ずかしい」

自分の陰囊で塗りたくった状態で帰るなんて。

「大丈夫、この後のことでそんなこと全部飛んじゃうから」

「この後……どうしたらいいんですか」

「次はいよいよ股間を洗うよ。でも健斗くんにももうおちんちんはないから、健斗くんはこのペニバンをしてね。ヒナちゃんもこれが健斗くんの大事なおちんちんだと思って優しく洗って」

「はい……」

玩具だ。シリコンでできたペニス型の玩具。そう思うのに、健斗の股間についていると思うと緊張する。  
「んっ……」

「この時点で勃起していないお客さんはいないから、潰してしまわないようにゆっくりと腰を振って……  
そう、上手。亀頭から根元までね」

「はいっ……ん、きもちっ」

仕事でだし、今はお客さんに奉仕しているはずの時間なんだから自分が感じてはいけない——そう思うのにいやらしい声が出てしまう。気持ち良くなってしまふ。だってもう自分にはないペニスに陰囊を擦りつけて洗っている。

「うん、いいよ。たくさん感じて、えっちなヒナちゃんをお客さんに見てもらおうね。自分はもう感じられない快感をお客さんに与えてあげて」

「あっ……そんなっ……」

想像するだけで感じる。興奮する。お客さんは今、ペニスで性感を得ているのだ。もう一生、どうあがいても二度とひなたが感じられない性感を、そのペニスで。そしてそれを与えているのは自分——。

「あああっ——」

「すごい……想像だけでそんなえっちな……ん？　もしかしてヒナちゃんイっちゃった？　おちんちんの断面がひくひくしてるよ」

ペニスの付け根、傷痕の部分を見き込まれる。恥ずかしい。至近距離からイったばかりの断面を見られている。

「あ……すごい……精液垂れてきたよ。ゆっくり流れてる……本当にイっちゃったんだね」

約6万1千文字です。

宜しくお願い致します。